

長岡京発見の琴形

埋蔵文化財センター

倭琴の模造品 琴の歴史は古い。今日、琴は桐の胴に13本の弦を張った弦楽器を指すが、これは箏と呼ぶ中国の楽器であり、あわせて琴とするのは江戸時代からのこと。奈良時代の琴は6弦であり、7弦の唐琴、12弦の新羅琴と区別するために「倭（和）琴」とよぶ。倭琴の遺品は正倉院宝物に10面ほどがあり、古代琴を研究する上に貴重である。1994年の平城京第252次調査で、左京七条一坊の東一坊大路西側溝から琴形が見つかり、これを機に過去の調査例を見直し、長岡京跡に琴形があることを見いだした。これは報告書で小刀の鞘とされた遺品である。

発見位置は、長岡京左京二条二坊八・九町の東二坊々間小路と交差する東西溝SD1301。太政官厨家木簡が見つかったことで有名な溝である。発掘の日付けは1980年7月5日。

本例はヒノキの一木から表板と側板を削り出す。表板の表面は甲高に作り、ややていねいに調整するが、裏面は調整が雑で削り痕が粗い。琴頭近くに弦孔を6カ所あける。長さ28.6cm、幅3.4cm、高さ1.1cm。年代は伴った木簡から、790（延暦9）年の秋頃である。

古墳時代の琴には板作り琴と、共鳴装置（槽）がある槽作り琴があり、槽作り琴は一本から側板と底板を削り出し（槽の横断面形は口形）、大きめの表板を載せる。他方、倭琴は唐（中国）琴などの影響を受けて、表板と側板を一体で作り底板をはめる（槽の横断面形は冂形）。

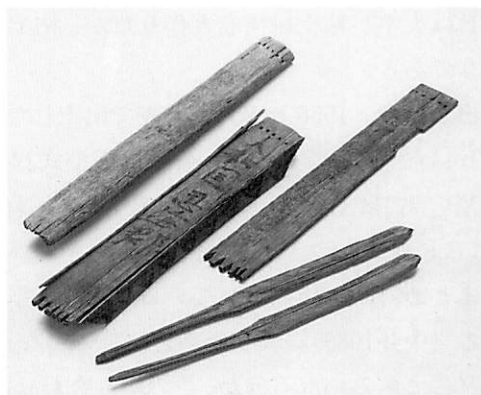
本例は6弦であること、槽の横断面形が冂形を呈することで倭琴の特徴を備える。ただし、底板やこれを留めた痕跡がなく、底板は最初から略したのであろうか。

たまふりの琴 琴（箏）の音を聞くことは正月行事と化した。が、弾琴は時代によって意味に違いがあり、もとはたまふり（魂振り）や神の言葉を聞く託宣の手段だった。桜の季節には花見が盛んである。花の強い霊力を見ることで体に入れ、たまふりすることが花見の本来の意味である。聞く喜び、聞く楽しみもやはり同様の行為であった。たまふりは、肉体から遊離した魂を呼び戻して体内に鎮め、衰えた魂を揺り動かして霊力を復活させる呪術で、たましずめ、魂結びともいう。これに関わる重要行事に鎮魂祭がある。令制下の宮中では毎年11月、新嘗祭の前に天皇などの健康と長寿を祈ってこれを行った。ここでは、伏せた槽の表を琴の音に合わせて矛で突き響かせ、同時に御衣を納めた箱を揺り動かしてたまふりをした。琴のさやかな音がたまふり作用を持つだけでなく、それに合わせた所作によっても、効果を上げたのである。

たまふりのももとの意味からみて、鎮魂は宮中だけの儀式ではありえない。本琴形はまつり用の模造品であること、790年頃という時代からみて、長岡宮に出仕した貴族・官人層が鎮魂に用いたのではないか。本例に矛形風の木製品が伴うことも、その傍証になろう。

保存の方法 本例の保存処理は、1989年に開発した高級アルコール含浸法によった。これは、木製遺物をメチルアルコールで脱水後、高級アルコール・メチルアルコール溶液（60～70%）を含浸させるもの。歪やヒビ割れなどがなく優れた方法である。本例も仕上がりの状態は、良好である。

（金子裕之、肥塚隆保）



長岡京と平城京の琴形（←長岡京→平城京）